

令和5年度テーマ展「漂着物の考古学」開催報告

一石狩川河口周辺・石狩浜にみられる

漂着遺物を対象とした今後の考察に向けて一

Report on the theme exhibition “Driftage archaeology” held in 2023;
Driftage archaeological artifacts on Ishikari beach and estuary of Ishikari river

荒山 千恵*
Chie ARAYAMA*

キーワード：漂着物考古学，漂着遺物，石狩川河口周辺，石狩浜

1. はじめに

本稿では，令和5年度秋季テーマ展「漂着物の考古学」（開催期間：2023年9月20日～11月6日，会場：いしかり砂丘の風資料館）の展示概要を報告し（荒山，2024），本展で対象とした漂着遺物をもとに，今後の課題について述べる（図1）。

2. テーマ展「漂着物の考古学」の概要

本テーマ展「漂着物の考古学」は，北海道石狩浜および石狩川河口左岸周辺域（図2）に流れ着いた漂着物（漂着資料）を対象に，特に漂着遺物を中心とした考古学及び関連諸分野からその起源や由来を探究し，地域の歴史・文化について紹介することを目的に開催した。いしかり砂丘の風資料館の学芸員・学芸協力員がこれまでに採集した漂着遺物を中心に，一般の方から情報提供いただいた漂着物や，関連資料・比較資料として他機関が所蔵する絵図や写真を交えて展示した（写真1）。特に，本展で紹介した土器・陶磁器類・琥珀類・

木製品などの多くの資料は，学芸協力員の石橋孝夫氏が長年にわたり石狩浜を中心としたフィールドで確認してきた調査情報に基づくもので，既に主要な漂着物の概要や考察について報告されている（石橋，2014；2018；2019；2021；木戸・石橋，2014）。また，自然由来の漂着物については，いしかり砂丘の風資料館・自然史担当の志賀学芸員から情報提供や協力をいただいた。展示資料は一覧（表1）のとおりで，資料数は計70点ほどである。



図1. テーマ展「漂着物の考古学」のポスター

* いしかり砂丘の風資料館 〒061-3372 北海道石狩市弁天町30-4



図2. 石狩川河口・石狩浜の位置
(出典：国土地理院ウェブサイトの地図に文字情報と石狩市域を示した概略図を追加)



1. 土器 (漂着)



2. 陶磁器 (漂着)



3. 魚たたき棒 (漂着・比較資料)



4. ココヤシ (漂着・比較資料)

写真1. テーマ展に紹介した展示資料の例

表1. 展示資料一覧

1	漂着資料：土器・土製品(土製支脚) ^(注1) 比較資料：石狩市若生C遺跡 ^(注2) 出土の擦文土器・北大式土器・後北式土器〈写真〉
2	漂着資料：陶磁器類
3	漂着資料：琥珀・琥珀製装身具 比較資料：石狩紅葉山49号遺跡 ^(注3) 出土の琥珀製装身具及び琥珀原石
4	漂着資料：魚たたき棒 比較資料：カナダの民芸品の魚たたき棒，平取町で使用された魚たたき棒 石狩紅葉山49号遺跡出土の魚たたき棒〈常設展〉 アイヌ絵にみる魚たたき棒〈パネル展示〉 i)アイヌ風俗十二月月屏風「7月 鱒漁図(テシ漁図)」 ^(注4) 平沢屏山(1822-1876)／市立函館博物館蔵 ii)鮭漁図屏風(1912年制作) ^(注5) 木戸竹石(生没年不明，幕末～大正頃)／北海道立総合博物館蔵
5	漂着資料：ココヤシの実 比較資料：石狩浜に漂着した小孔のあるココヤシ〈写真〉 ^(注6) 長崎県壱岐市原の辻遺跡出土のココヤシ ^(注7) ／壱岐市教育委員会蔵〈写真〉 島根県西川津遺跡・タテチョウ遺跡出土の土製品 ^(注8) ／島根県教育庁埋蔵文化財調査センター蔵〈写真〉 ココヤシの特徴をもつ弥生文化の土製品〈復元模型〉

3. 石狩浜をフィールドにした漂着物考古学 - 今後の課題と展望について

石狩浜の漂着物を対象に「漂着物考古学研究ノート」をまとめた石橋(2014)は、漂着遺物について次のように仮称を定め、地域研究の一助としている。

「(前略)この浜の漂着物のなかには専門に直接関係する遺物あるいは地域の歴史の理解あるいは解釈するために有効な資料となるものが存在する。筆者はこれらを「漂着遺物」と仮称している。例として土器片・石器をはじめ、ココヤシ、コハク、陶磁器などがあげられる。」(石橋, 2014: 41)。

考古学分野では、海漁などで発見される「海揚がり品」や、海底遺跡や沈没船などを対象とした水中考古学による調査で発見された遺物など全国各地の報告が知られている^(注9)。石狩浜および石狩川河口周辺については、内陸から石狩川により

運ばれて河口兩岸や石狩浜に漂着したのもも多く、海域から運ばれてきた漂着物とともにその起源となる年代や地理的範囲は多様である。個別資料の考察については別稿に改めることとし、以下に本テーマによる展示をとおして確認された今後の課題について記す。

第一に、本テーマ展で取り上げた漂着土器については、続縄文～擦文文化を主体とし、石狩川下流兩岸一帯の遺跡周辺を起源として河川を經由して運ばれてきたものと推測されるものである。ただし、これらの土器の中には、当該地域の出土土器の胎土や文様にはあまり見られない特徴をもつ例もあり、近隣地域に位置する遺跡から出土した土器との比較、他地域からの搬入品の可能性、あるいは変色の可能性を含めてさらに検討が必要である。

第二に、石狩市域を対象とした漂着物考古学で検討するならば、本稿で対象とした石狩浜及び石狩川河口周辺から離れた海岸・海中に関する漂

着遺物の情報もある。例えば、1864(元治元)年の秋に石狩市厚田区知津狩で鮭網(曳き網)にかかった海揚がりの阿弥陀如来像が、現在も厚田区内の寺院に安置されている(石橋, 2017)。また、石狩川河口から10kmほど北側の海中域に古潭浜遺跡(縄文早期)が掲載されているが、これは海底遺跡ではなく海岸段丘上に形成された遺跡が浸食により落下したものと考えられている(注10)。石狩市域全般を対象とした漂着遺物については年代的・地理的範囲が広く、体系的な情報の整理・精査(傾向など)が必要である。

第三に、石狩湾周辺に産出・自生しない自然由来の漂着物についてである。人々が漂着した自然物を暮らしの中でどのように利用してきたかを検討する手がかりとして注視される。今回の展示では、漂着した琥珀原石・琥珀製装身具およびココヤシの実について紹介した。琥珀(注11)について、石橋は「石狩浜や望来浜に漂着するコハクは、石炭と混在して漂着し、中にコハクが挟まれるものがあることから漂着コハクも石狩川上流の炭田起源であるといえる」、「続縄文時代以前では量や原石形状から石狩浜や望来の漂着コハクが装飾品として石狩川上流部へ供給されていた可能性がある」と述べ、原材に漂着コハクを利用した可能性を指摘している(石橋 2014: 45-46)。石狩浜に漂着するココヤシの実については、南方から海流(対馬暖流)に運ばれてきたものとみられる(志賀, 2008; 志賀・伊藤, 2008; 荒山, 2012; 2016; 石橋, 2014; 鈴木ほか, 2015)。道内の遺跡ではココヤシの実の出土例は確認されていないが、本州以南では、これまでに縄文~奈良・平安期の11遺跡からココヤシの実が出土している(注12)。出土品には内果皮を容器などに利用したと考えられる例がある。自生していないココヤシが遺跡から出土することから、当時の人々が海辺で漂着ココヤシを採集し、遺跡地へ持ち込んだ可能性が考えられ、漂着植物の利用が窺われるようになっている。

今後も、漂着遺物の情報整理や個別課題の考察をとおして、日本海沿岸域の漂着遺物の起源や由来を探究し、地域の歴史や文化を繙く手がかりの一つとして注目していきたい。

謝辞: テーマ展「漂着物の考古学」の展示に伴う画像利用にあたり、壱岐市教育委員会、壱岐市立一支国博物館、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、市立函館博物館、北海道博物館の各機関に大変お世話になりました。また、石狩市学芸協力員の石橋孝夫氏、いしかり砂丘の風資料館学芸員の志賀健司氏からは、漂着情報や資料情報など多大なご教示・ご協力を賜りました。末筆ながら心より御礼申し上げます。(機関名は五十音順。)

(注1) 北海道大学埋蔵文化財調査室(1986)をもとに土製支脚を紹介した。

(注2) 石狩町教育委員会(1975; 1976; 1977)。

(注3) 石狩市教育委員会(2005)。

(注4) 市立函館博物館(2022)、北海道博物館(2022a)他を参照した。

(注5) 北海道博物館(2022b)にて当該資料を実見した。

(注6) 写真出典は石橋(2014)。合わせて、鈴木ほか(2015)をもとに紹介した。

(注7) 長崎県教育委員会(1998; 2003)他。

(注8) 島根県教育委員会(1979; 2000)、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(2001)、島根県土木部河川課・島根県教育委員会(1989; 1990)他。

(注9) アジア水中考古学研究所(2001-2024)、越前町織田文化歴史館(2015)、国立文化財機構奈良文化財研究所(2021)、小峰(2022)、新潟県海揚がり陶磁器研究会(2014)、札幌学院大学考古学研究所(2019)、文化庁文化財第二課編(2022)等を参照。

(注10) 石橋孝夫氏からのご教示による。

(注11) 近年の北海道の続縄文遺跡から出土した琥珀製平玉の産地同定に関するものとして、小笠原・原(2022)の論考がある。

(注12) 「福井県鳥浜貝塚、千葉県粟島台遺跡、滋賀県下之郷遺跡、兵庫県玉津田中遺跡、島根県西川津遺跡、福岡県比恵遺跡、長崎県里田原遺跡、長崎県

原の辻遺跡，平城京跡（左京八条二坊五坪）」（石橋，2014:44）に，山形県小山崎遺跡（遊佐町教育委員会，2017），石川県中屋サワ遺跡（金沢市，2009）を加えた11遺跡である。

引用文献

アジア水中考古学研究所，2001-2024. 特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所公式サイト. <https://www.ariua.org>

荒山千恵，2012. 漂着ココヤシに想いを寄せて（いしかり博物誌 121）. 広報いしかり（2012年9月号）：11

荒山千恵，2016. 口絵2 容器状の漂着ココヤシ. いしかり砂丘の風資料館紀要，6：iii - iv.

荒山千恵，2024. 石狩考古学 - 漂着物の考古学. 連続講座「石狩大学博物館学」(レジュメ)，(開催日：2024年2月10日).

文化庁文化財第二課編，2022. 水中遺跡ハンドブック.

越前町織田文化歴史館，2015. 海揚がり. 越前町織田文化歴史館デジタル博物館.

<https://www.town.echizen.fukui.jp/otabunreki/panel/25.html>

北海道大学埋蔵文化財調査室，1986. サクシュコトニ川遺跡2 図版編.

北海道博物館，2022a. クローズアップ展示1『蝦夷風俗十二ヶ月屏風』を読む. (展示期間：2022年4月15日～12月14日).

北海道博物館，2022b. クローズアップ展示2 木戸竹石「鮭漁図屏風」. (展示期間：2022年10月14日～12月14日).

石橋孝夫，2014. 石狩浜漂着物考古学ノート1; 石狩浜の漂着遺物とその履歴. いしかり砂丘の風資料館紀要，4：41-54.

石橋孝夫，2017. 海揚がりの神様仏様（いしかり博物誌 148）. 広報いしかり（2017年3月号）：11.

石橋孝夫，2018. 石狩浜漂着の魚叩き棒は誰のものか？ - 北海道魚叩き棒の系譜を考える -. いしかり砂丘の風資料館紀要，8：1-22.

石橋孝夫，2019. 石狩浜漂着物考古学ノート3; 2018年石狩浜・石狩川河口左岸採取の漂着物 擦文文化の遺物・白い徳利・竹舟？・赤煉瓦と丸瓦. いしかり砂丘の風資料館紀要，8：1-8.

石橋孝夫，2021. 石狩川河口左岸で採取された穴のある漂着コハク. いしかり砂丘の風資料館紀要，11：1-8.

石狩町教育委員会，1975. Wakkaoi - 石狩・八幡町遺跡ワッカオイ地点調査報告書.

石狩町教育委員会，1976. Wakkaoi II - 石狩・ワッカオイ地点D地区における続縄文末期の発掘調査.

石狩町教育委員会，1977. Wakkaoi III - 石狩・ワッカオイ地点D地区における続縄文末期の発掘調査.

石狩市教育委員会，2005. 石狩紅葉山49号遺跡発掘調査報告書.

金沢市，2009. 石川県金沢市中屋サワ遺跡IV・下福増遺跡II・横江荘遺跡II. 金沢市埋蔵文化財センター.

木戸奈央子・石橋孝夫，2014. 石狩浜漂着物考古学ノート2; 石狩浜・石狩川河口に漂着した陶磁器. いしかり砂丘の風資料館紀要，4：55-60.

国立文化財機構奈良文化財研究所，2021. 遺跡調査技術集成 水中遺跡調査編Ⅲ 研究集会 水中遺跡保護行政の実態Ⅲ. 埋蔵文化財ニュース，No.182.

小峰彩椰，2022. 第5章 調査報告 開陽丸調査報告. 南北海道考古学情報，(南北海道考古学情報交換会)，16：19-20.

長崎県教育委員会，2003. 原の辻遺跡. 原の辻遺跡調査事務所調査報告書第26集.

長崎県教育委員会，1998. 原の辻遺跡. 原の辻遺跡調査事務所調査報告書第9集.

新潟県海揚がり陶磁器研究会，2014. 日本海に沈んだ陶磁器 新潟県内海揚がり品の実態調査，61.

織田文化歴史館，web. 海揚がり.

<https://www.town.echizen.fukui.jp/otabunreki/panel/25.html>

小笠原正明・原奈々絵，2022. 北海道の続縄文遺跡から出土した琥珀製平玉の産地同定とその流通. 文化財科学，84：37-57.

札幌学院大学総合研究所主催，2019. 日本の水中考古学と北海道（講演・報告），会場：北海道大学文系共同講義棟，開催日：2019年11月30日.

志賀健司，2008. ココヤシ. エスチュアリ，いしかり砂丘の風資料館 No.31.

志賀健司・伊藤静孝，2008. 2007年に石狩湾沿岸で見られた暖流系漂着物. 漂着物学会誌，6：11-16.

- 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 1989. 朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ.
- 島根県土木部河川課・島根県教育委員会, 1990. 朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ.
- 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター, 2001. 西川津遺跡Ⅷ.
- 島根県教育委員会, 1979. 朝酌川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ.
- 島根県教育委員会, 2000. 朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅶ.
- 市立函館博物館, 2022. 令和4年度市立函館博物館企画展図録 平沢屏山とその時代.
- 鈴木明彦・石橋孝夫・志賀健司・圓谷昂史, 2015. 北海道石狩浜への穿孔性二枚貝カモメガイモドキの漂着. ちりぼたん;(日本貝類学会研究連絡誌), 45(3): 162-166.
- 遊佐町教育委員会, 2017. 鳥海山の湧水が残した小山崎遺跡(改訂).